



昨年、法政大学が文科省の推進する『スーパーグローバル大学』に採択されたことで、付属校の第二中・高等学校でも、これからの時代を生きるグローバル人材の育成に期待が寄せられている。もともと海外との交流には積極的に取り組んできた。中学校での国内外の研修旅行を皮切りに、高校では、英国オックスフォードで3週間の英語研修を実施している。選考試験はあるが、800年の歴史を刻むヨーロッパ屈指の美しい大学街で過ごす時間は、生徒たちにとって一生の思い出になるものだろう。さらに、もう一つ特筆すべき制度もある。「付属校特別派遣留学制度」は、法政大学の3付属校から選抜された生徒が米国コネチカット州にある名門サウスセント校へ1年間留学できる制度で、1年間の学費の約6割を法政大学が負担する。しかも、帰国後は、法政大学への被推薦権を持ったまま、下の学年に編入することなく進級できる。中

学、高校、そして大学と10年一貫の教育を見据えた付属校だからこそできる試みだ。「こうした海外で学ぶ経験を積極的に活用していただきたい」と、広報担当の上山勉先生も語る。一方、海外から帰国する生徒の受け入れに對してはどうか。「実は、来年度の中学入試では海外帰国生枠を新設することにしたんです。現在でも同校で学ぶ帰国生はいますが、帰国枠として募集はしていませんでした。一般の入試で入ってきた生徒もいます。みんな学校で大いに活躍してくれていますよ」と上山先生。募集枠が設けられることで、同校への進学を考える帰国生にとっては、受験しやすい環境が整っていきはす。ただ、「入学後は帰国生に特別な対応を取ることは考えていません」と上山先生は言葉を続ける。「なぜなら、当校の教育の特徴として『多様性』があるからです。本校では、いろいろなタイプの生徒が同じクラスで学ぶことに意義があると考えています。一人ひとりの個性に違いがあるからこそ、その違いを認め合うことができます」。同校では、中学で基本的な学力の定着を目

指し、高校で「調べる・討論する・発表する」ことを重視しながら、自ら考える力、人に伝える力を養っていく。前述の『多様性』はこうした教育の中で生きてくる。ディスカッションしながら共同作業を進めることで、他を認めることを学び、集団として力をつけていく。それが一人ひとりの視野を広げ、世界を舞台に活躍する人材の育成につながるのだ。

そして、『多様性』を認め合うという点で、同校はもう一つの大きな転換期を迎えている。来年度からは共学校として女子を迎え入れる。女子のために女子バレーボールや女子バス



ケット、チャリーディングのほか、家庭科や茶華道などの部が新設され、今から準備が進められている。また、新年度に向かい新校舎の建設も着々と進む。生徒と教員のコミュニケーションをより密に図れるように開放的な交流スペースを設けたり、総合メディアセンタ―として機能する図書館を新設したり、さまざまなものが新しく生まれ変わっていく。もちろん、こうした転換期にあっても『多様性』の中で個を磨く同校の教育スタンスに揺るぎはない。だからこそ時代の求める人材育成が可能になるのだ。



## 法政大学第二中・高等学校

# 多様性の中でこそ、互いを認め合い、グローバルな視野を持つ人材が育つ。

JR線、東急線がアクセスする武蔵小杉駅から徒歩で12分。  
法政第二中・高等学校の広大な敷地では新校舎建築が進む。  
迎え入れる生徒のために新たな門戸を開いた。  
共学化し、帰国生のための受験枠も新設する。  
『多様性』の中で学ぶことを重んずる同校の新たな挑戦は、今まさに進行中だ。



『缶サット全国大会』にて優勝し、アメリカで行われた世界大会にゲストとして招待された物理部

